

石川伍一日記を読む（五）

大里 浩秋

まえがき

ここに載せる石川伍一日記の解読文は、本誌第一九一号、一九二号、一九三号、一九四号に掲載した文の続きに当たる。石川伍一の経歴については、第一九一号に簡単に紹介し、より詳しくは第一三五号に「石川伍一のこ」とを發表しているのので、参照していただきたい。

解読文は、原文中のカタカナはひらがなにし、人名を除く漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を付している。また、「」によって文字の不足や不明な点を補ったところがあり、原文中に空白がある個所は、その通りに空白にした。解読できなかった文字は、一字分を□一個で示した。解読に際して、今回も常民文化研究所田上繁教授（現名誉教授）の援助をいただき、おかげで解読不明の文字をだいぶ減らすことができた。

心づもりでは、間をおかずに解読文（五）を發表するとともに、（一）から（五）までを合わせて解題を準備するはずであったが、時を置き、かつ解題を準備できないままに今に至った。不始末を恥じつつ、次回を期した

いと思う。

明治十九年九月から十一月の日記

九月中記事

一日 雨 水

二日 曇 木

上海より上田、横山、二宮の三氏着す。上二の二氏は佐氏の寓に宿す。

五日 晴 日

領事館に遊び、夜闘牌共にするもの七人。

七日 晴 火

天津へ北京より辻本、内藤二氏着す。辻本氏は肺病の爲め帰国するなり。

仏国公使着す。

此頃にとり日本より達せし新聞紙及び諸報にて長崎事件の委細知れたり。此れは去月十三日の夜定遠号の水夫青楼に上り乱暴をな〔し〕たるを巡査は之を拘引したり。故に水兵等互に合同し其仇を報せんとて同十六日夜巡査に喧嘩を仕掛け警察署を襲へりと。

露国は朝鮮東方にある海港北青を借り軍艦〔港〕となさんとして強談し、又朝鮮は魯国の保護を仰ぐの密書を魯

帝に送れりとして袁世凱は大に怒り、清国軍四隻とか仁川に碇泊し、李鴻章は露韓交渉事件に付仏公使をして調処せらんことを願へり。

九日

李氏は先にテットリン氏に某人を派し、日本に行き海岸要図を得せしむるを命したるに、某人は上海に在り為す所なく帰りたる故、李氏は徳氏を不快に思ひ官閣上の事を探りしに、不正の事も多かりしとかにて大に怒り追出さんと云ひ居る由。

又李氏は清公使により露韓事件を調停せしめんとするとか諸説紛々た〔り〕し。

十日

風邪に罹る積氏七日許前より風邪にて咽中はれ甚だ悪し。

十三日

積氏咽中腫甚しく、飲食進まず。咽及頭部非常に疼む故にぱつぷにて咽を暖め氷にて口中を湿ふしたれども、益つ疼甚たしきを以て西医を請す。西医は心配すへき病に非るを告げ一匣薬を与へて去る。

十四日

朝大夫来る。積氏の切に腫れたる所を切るを望むを以て午後に来るを約して去る。午後来り口中左方腫れたる処を二刀切りたるに、出血甚たしく心地少し宜しきを以て医士は帰る。此日鄭氏急に長崎に赴くの命を受け海晏にて上海に航す。之を送る。聞くに、長崎事件に通弁者なく為めに鄭氏を招き鳩山書記官の繙訳官に充つと。此夕積氏疼甚為〔に〕話も出来ぬ程なれば、医士を招くに赴きたりに家に在らず。少焉して氏の腫物破れ臭きうみ出

てより心快く凡ての苦みを忘れたり。依て医士を辞す。

十五日

大に好し。此夜上田氏豊順号にて上海に帰る。

十六日 曇

此頃は又た急に熱くなりたり。

十七日

牟田氏に送信、予か此に来る所以、当地景況望月、又東京のこと。

二十五日 土

横山、二宮二氏高陞号にて上海に帰る。

二十六日

二十一日独逸海軍少将クノーヒスマーク及其他の四隻を率ひて太沽に到り、二十三日少将はウーフ号に乗り紫竹林に至り李氏に面会せり。李氏は此の二十六日を以て答礼の為且つ操練を見んか為め、鎮海号に坐し鎮西、鎮辺、鎮東の三隻を率ひ太沽に発せり。又李氏は少将に牛十頭、羊五十頭を送りたりと云ふ。而るに其後聞くに右の贈物は其出帆に間に合はざりしと。

二十九日

此夜深更領事館に着。伊東小太郎氏孰〔敦〕賀丸にて到着。

三十日

伊東氏来る。此日鄭夫人長崎に帰らんか為め金崎丸に上る。之を送る。朝鮮の 大臣通商事務米人デンニー氏

帰朝す。此頃佐々木氏は銅十萬斤を機器に売込めりと自ら云へり。

跟班及廚子の改革を行ふ。

二十六日

積氏太沽に赴く。翌晚十一時過歸家。

十月中記事

二日

家弟に送信、内に大人に呈する書を包む。此信は前週に出すべかりしを免れたるなり。

三日 曇。此夜雨降。

佐々木氏と天津に赴く。氏は予に衣服三件を買与せり。代五元なり。

四日 後大雨、頃刻而止。

十月六日 晴

此日は九月九日重陽の節に当るを以て郊遠をなさんとて、領事始め小田切君及五、六人にて駟に乗り高氏の墓辺に遊ぶ。清人は此日高きに登るとて玉皇閣に登ると云ふ。

七日

此日より張先生を招きて自家にて読むことに定めたり。

十日 日曜

此日領事館に角力会ある筈なれども天氣不好にて止たり。夕暮領事、小、上、堀、伊諸氏と馬に乗り競馬場に到る。

十四日 好晴。

副島氏の病を訪ふ。氏は兩三日前より急に下痢吐瀉を始め、時疫に罹りしならんと云ふ。予が行きしときは快氣なりしか、其容貌の衰たるは其病の烈しきを思ふに足る。武齋号は益々其店を広めたり。三井物産会社の頼朝丸鐵道用材木を載せて沽浜に着す。

十三日の夜川島浪速なる人着す。氏は前に三月頃積氏出発の頃世話せんと約し旅金子を残し置きたるに、氏は之を浪費し来らず、一通の信もなく、今突然来れり。積氏怒て其不始末を責め断然之を辞せり。氏漸く旧友小田切の世話にて頼朝丸にて上海に行く〔事〕になりたり。旅資など小田切の恵する所なり。氏は少年自負の氣あり、未た其志す所を知らず。此時牟田氏より信達す。

二十二日

澤村氏より信至る。

上海より田代助作氏及従者一名着津、小笠原、宗方、荒賀諸子の信を得て、以て旧友の安福を知るを得たり。荒賀氏は事ありて帰朝し、小笠原氏は眼疾に罹り、宗方氏明春を待て將に北地に遠遊せんと欲すと。

小笠原氏より東京日々新聞を送られ、聊か故国の情形を詳かにす。亦□公の害を免るゝ能はず。今年の□公は地方へ余程手を広めたる様子なり。澤村氏に送るべき行李も亦達す。

二十四日

先きに宗方、小笠原両氏に送るの信を草したりしに、忽ち其信に接したるを以て其返信を兼ね此日発信す。北京澤村氏に返翰を送る。

此日四時半 呉大徵着津す。兵士河岸に整列し之を迎る時に祝砲を発す。威儀堂々たりしと云ふ。氏は今茲二月命を奉し朔北不毛の地に入り露と交界を正す。其任重く其事大なり。而して氏は当今の名士なり。不知如何か其局を結ひたる。

二十三日

大坂の東亜貿易会社派する所の股本、沼田、辰馬、上原の四人なり。聞く、沼田氏は曾て陸〔軍〕より北京に留学せしめる三年、帰り青森に赴き語学を教へ、病を以て辞〔有事〕し、又外務〔省〕より朝鮮京城に遣られたれども、氏は常に北清の貿易に志し、此に至て大坂に帰り之を商人に謀る。一場の演説能く衆聴を感せしめ、以て東亜貿易商会の創する所以と云ふ。其本意を聞くに、先づ資本株を三万円とし専ら日清人の間に在り其商賈を媒するを目的となすと云ふ。

田代氏今月三日副島氏と共に来り、互に相協力すへきを約したるに、此度電信用磁器のことより相合はず、徳丸氏為めに其通辞の労を取らざるを以て、氏等は啞者の如く末子の慈母を失ふ如く、遂に積氏に請ふて予〔を〕して此煩勞に当らしむることとなれり。予は為に幾多の時日を徒費せり。予の関したるは即ち〔ち〕茶碗買売のことなり。田氏三月来りしとき当地宝祥順なる雜舗に売与せし縁を以て、此度も亦此人に売込まんとの見込なるか、

当地近來日本茶碗の輸入甚た多きを以て爲めに大に下落を致し、當時先方の言ふ所る千個十□なり。氏の三月に來りし時は十五元に売りしとか。其差亦甚たしと云ふべし。

三十一日

伊東君及び古舘氏と天津を縦覽す。估衣街を経、北門より南門に出て、海光寺傍の街路に沿ふて帰家。

十一月

二日 明日は我か

天皇陛下の天長節に當るを以て、競駟捕鵝競走等の計画の外、異装の打扮人を驚かし以て其人の誰たるを知らしめざるを主とするを好とし益々奇なれば益々善とするの趣向なり。故に此日は準備の爲に半日を費す。天津に赴く蓋し茶碗のこと。

三日 此日は朝九時頃より

天皇陛下の聖寿無疆を祝せんか各礼服にて領事館に來り。

聖影を拝し將に野外の遊をなさんとせしに、天色濛朧雨ふらんとする如し。皆な不平の色あり遂に行を決す。予は白馬を挾て第一に馳せ家に帰り換衣場に上る。場は旧競馬場の傍なり。後に予か乗せし白馬第一の駿逸なりしか、鬪を取るに及て遂に中らざりし。

第一競駟にて予及武内氏勝を得たり。第二同しく荻野氏、第三同しく堀内氏各一着なりし。第三には先勝者の加

入を准せず。一着は小田切氏なりしも規を犯せしを以て算せず。午餐を喫す。

捕鷄は、予七羽を得たり。余は皆な五羽より一羽に至る。次に競走なり。三丘上に旗を建て之を取り来るなり。小田切一、堀内二、予は第三なりし。此時の疲労甚しく一時誰も起き得ざりし程なり。終りは遠距離競駢なり。遠方に旗を立てたるを取り来るものなり。予の馬第一に着し旗を抜き取り馬首を回らし帰らんとするに策てとも走らず。両三馬予を逃きて走る。怒り之を策ふ甚たし。馬亦怒り飛走す。両三馬を乗越したれども、已に白馬と距る遠く遂に勝を制する能はざりし。白馬に乗りし者は奥村氏なり。予は第二。

七時異装にて、

予は一長頭長さ三尺斗りなるを造り、女の仕衣を借り腹を膨らし白髯を付け以て福祿寿に倣ふ。伊東氏は海軍将校之礼服に擬し、同しく領事館に至れば衆已に在り。尤も芳と称すへきものは武齋号の荻野氏の服装なり。を以て造りたる上礼風の衣を着し素麵箱を履とし頭に を戴き、右に竹杖を執り、左に大なる の煙草入れを携たる女打扮、今日の第一なるべし。其外支那劇場に用ゆる衣裳を借り着し仮髯を用ひし者両三人猥々、一人薩摩武士、田舎武士、おかめ万歳、支那女、支那役人、亜非利加土人、公卿、虚無僧、領事は支那水兵様の服なりし。其外数々あれども多くは奇とする「に」足らず。

食終り芸尽しあり。落語、謡歌、茶番等天津未曾有の盛会にして各歡樂を尽したる、今日の如きあらざるなり。此日松本文恭氏到着す。北京に赴かんとす。今日予か得し商品は非凡之勝壮士之功労凌雲関伝 名及び銅花瓶一個なり。遂に韓廬 之魁及筆鋒の鋭利を得ざるは残念なりし。

六日

松木氏北京に赴く。澤村氏に寄するの信及び行李を托す。

七日

東京弟壽より書至る。出遊紀行と又予か前書に答ふるものなりし。安保より信達す。予か書の答信、家郷の光景を知るを得て聊か旅情を慰む。

北京澤氏の書至る。蓋し松木氏未だ着せざるに発せしものにして行李のことを云ふ。

十三日

此夜同昌に赴き東亜貿易商会の諸氏を訪ふ。会談数刻、又木氏予を呼て北京行の用件を托す。此れ予か固より願ふ所なり。而るに事ありて行を果さず。

十四日

此日前諸氏天津に移る。蓋し舗を開きしなり。仁記洋行の内を借りたるなりと。又木氏は上原と北京に赴きしと。此日漸く田代に托せられたる茶碗売售一件を完る。氏の為に費す所の時予か念書を妨けしこと少からず。売買の結果及景況は別に記す。

明治十九年十一月まで